

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

タイトル：「契丹語・契丹文字研究の新展開」（平成24年度第1回研究会）

日時：平成24年5月12日（土曜日）午後13:30時より午後18時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

報告者名（所属）：

1) 荒川慎太郎（AA研所員）

「ロシア所蔵契丹大字冊子について（ザイツェフ氏の研究より）」

ヴァチェスラフ・P・ザイツェフ（Зайцев, В. П.）の論文「ロシア科学アカデミー東洋文献研究所所蔵契丹大字写本」『東方文字文献』（原題 *Рукописная книга большого киданьского письма из коллекции Института восточных рукописей РАН // Письменные памятники Востока*, 2011年, 第2期（総第15期）, 130–150頁）をもとに同氏の研究を紹介した。

論文は、ロシア科学アカデミー東洋文献研究所に所蔵される貴重書、「契丹大字写本」についてである。以下、論文の構成順に概要を述べる。「1. 序」では、当該資料がロシア科学アカデミー東洋文献研究所にもたらされてからの経緯・整理状況を記述している。「2. 文献の説明」は、この特異な資料の形態・構成に関する紹介が、精密な図版とともに示される。資料は、6枚の紙をひとまとめにし、その背表紙を綴じ合わせた冊子体が主である。その構成法と、便宜的な丁付け、各ページの形式的な諸特徴が示される。冊子を覆う布地や皮表紙に関しても言及される。「3. 写本書籍の製作技術」は、書物としての製法・特徴について、さらに深く追求したものである。冊子の個々の段階の成立順などにも言及される。「4. 写本テキストの完全性」は、短い節であるが、本来はどのような姿で冊子が完全体であったかの推測を行う。「5. 写本の言語と文字」は、最も興味深い節である。当該写本に見られる文字に言及し、先行研究と精緻に比較することにより、冊子の文字が契丹大字であることを例証している。「国」、「皇帝」、契丹国の名称、そして契丹の年号と思しき文字列が明らかにされており、今後の研究の進展と冊子全体の内容の解明が待たれる。最後に「6. 結び」において、今回明らかになった点が総括され、今後の展望が述べられる。資料がカラ・キタイに関連するものではないかという推測と、その根拠もここで示される。出土地や出土状況に関する研究も続報が期待され、興味が尽きない。

2) 吉池孝一（愛知県立大学）

「契丹文字接尾語表」（『慶陵』1953）作製に関わる諸資料の紹介」

2010年1月、言語学者の長田夏樹氏が逝去された。縁あって2011年1月末、長田氏の契丹語と女真語の研究に係わるノートやカードなどを長田家より愛知県立大学の研究室にお寄せいただいた。長田氏はこの方面における研究の先駆者の一人であり、氏のノート類は

日本における契丹文字と女真文字の研究の歴史を明らかにするうえで得がたい資料となるはずである。これらの資料のうち、今回の報告では、『慶陵』（田村實造・小林行雄著、1953）に添付された「接尾語として用いられた契丹文字の類別表」（長田夏樹氏、小林行雄氏、山崎忠氏の名を冠して公表された）と密接な関係を持つ三つの資料を紹介した。この三つの資料は長田氏の逝去後に発見されたものである。一つ目の資料は、契丹原字につき、道宗哀冊と宣懿哀冊の語頭・語中・語末・単独の出現回数を表示したものである。「契丹原字出現頻度表」と名付けることができよう。二つ目の資料は、中期蒙古語の音節の音価に契丹原字を対応させた表である。この表に出てくる中期蒙古語の音価と契丹原字は、興味深いことに出現回数によって色分けされている。色分けをみると、契丹原字の出現回数は道宗哀冊と宣懿哀冊を合計したものとなっており、合計数は「契丹原字出現頻度表」によっていることがわかる。これを「契丹原字音価表」と称する。これら二つの資料が作られた時期であるが、音価を比較対照してみると、「契丹原字出現頻度表」と「契丹原字音価表」が先に作られ、その後に「接尾語として用いられた契丹文字の類別表」（1953）が作られたとみることができよう。そうであるならば、これらの資料により、契丹小字の音価推定の道筋を見てとることができよう。すなわち、先ず中期蒙古語の音節と契丹原字の出現回数を参照しつつ両者を対応させ、次いで各種資料により検討を加えて原字の音価を割り出すという方法である。三つ目の資料は、1953年8月に行われた講座案内の裏に書かれたメモである。これは「接尾語として用いられた契丹文字の類別表」の一部を抜き書きし注を付したものである。このメモをみると、契丹語の語構成法につき蒙古語のようなものであると考えていたことがわかる。すなわち、名詞に 1a を付して動詞を作り、さらにこの動詞に 1 を付して名詞を作るという語構成法を述べた部分を見出すことができるのである。

このような報告の後、直近の調査によって知りえた長田夏樹氏旧蔵の拓本資料二十数種（契丹文、女真文、満文、漢文）に触れて報告を終えた。

3) 近年の契丹研究に関する情報交換（全員）

近年新発見された契丹文字資料に関して、情報交換を行った。